



やまなみ工房

Atelier Yamanami

やまなみ工房は、1986年に「やまなみ共同作業所」として滋賀県甲賀市に開所。1990年、下請け中心の生産活動から表現活動を支援する施設へと方針を転換した。そのきっかけとなったのは、内職作業の合間に一心不乱に絵を描いていた一人の利用者の姿であった。この出来事を契機に、社会への適応や生産性を求めるのではなく、利用者一人ひとりの個性や自主性を尊重しながら、各自のペースで行う表現活動の支援に力を注ぐようになった。開設当初は3名だった利用者は、現在では90名を超える。

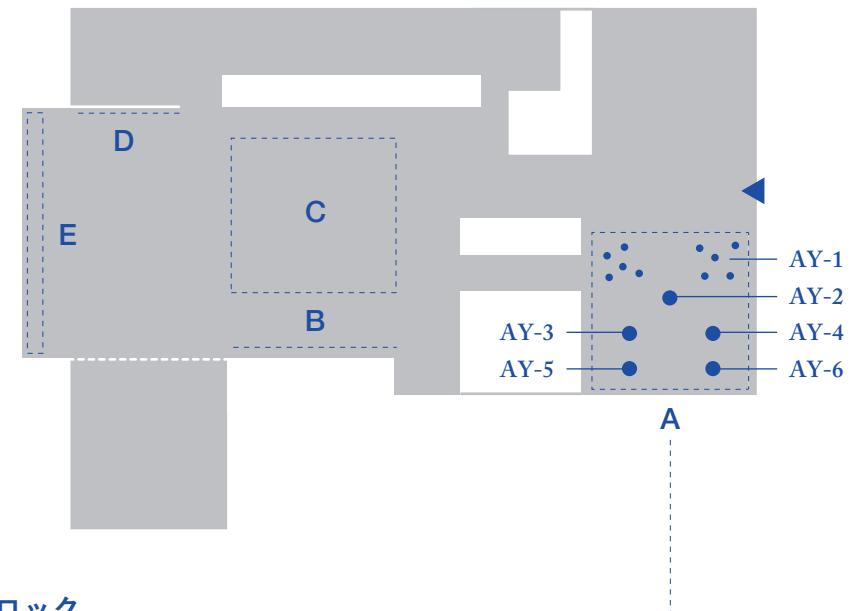
ここで生み出される作品は、国内外の展覧会で紹介され、ポンピドゥー・センターをはじめとする美術館のパブリックコレクションにも収蔵されている。工房の日常や制作風景を追ったドキュメンタリー映画『地蔵とリビドー』(2018年)の公開をはじめ、施設内のギャラリー・カフェ・菓子工房の開設など、創作を起点とした活動の輪が広がり続けている。また、やまなみ工房で生み出された絵画作品をテキスタイルデザインに展開するファッショングラン「DISTORTION3」をはじめ、多様なジャンルのクリエイターとの協働も積極的に行っている。さらに、商品パッケージに作品イメージが二次利用されるなど、企業とのコラボレーションにも広がりが生まれている。

本展では、同工房で制作活動を行う19名のアーティストによる作品を紹介する。平面から立体、衣服に至るまで、素材や技法も多岐にわたる多彩な表現が一堂に会する展示となっている。また、2021年からGO FOR KOGEIで制作してきたポスターに、イラストを描き加えるかたちでのコラボレーションも実現した。

参加アーティスト

青木昂、井野友貴、大家美咲、岡元俊雄、小川翔陽、河合由美子、北村悠、栗田淳一、四白、TAKATO、瀧口真代、田村拓也、中井寛虹、中内田幸大、NANA、森田郷士、山崎菜那、山根孝文、吉田楓馬(五十音順)

H-1 | HATCHi 金沢 by THE SHARE HOTELS



A ブロック

AY-1

吉田楓馬
コロボックル
2019
ミクスト・メディア

AY-2

吉田楓馬
シロオバケ
2019
ミクスト・メディア

AY-3

吉田楓馬
チャイロウサギ
2019
ミクスト・メディア

AY-4

吉田楓馬
水遁のカワズ
2022
ミクスト・メディア

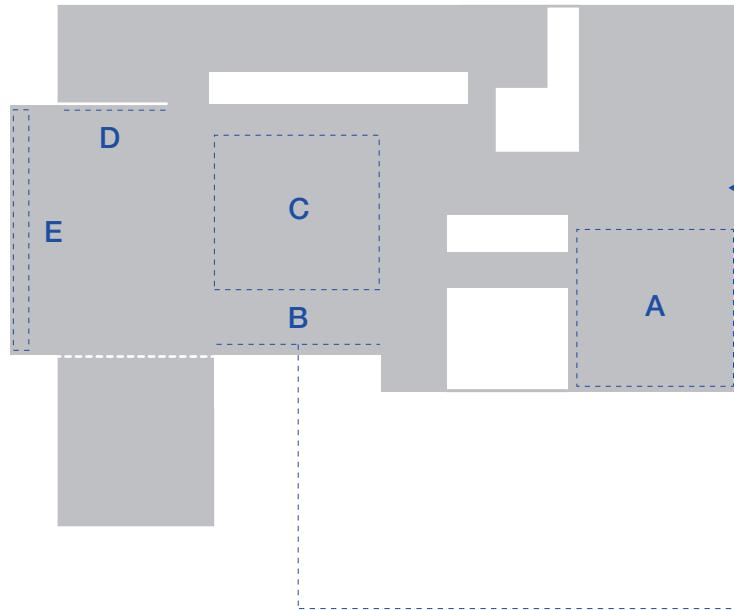
AY-5

吉田楓馬
我楽多ノ木
2023
ミクスト・メディア

AY-6

吉田楓馬
木遁のキツツキ
2022
ミクスト・メディア

H-1|HATCHi 金沢 by THE SHARE HOTELS



B ブロック

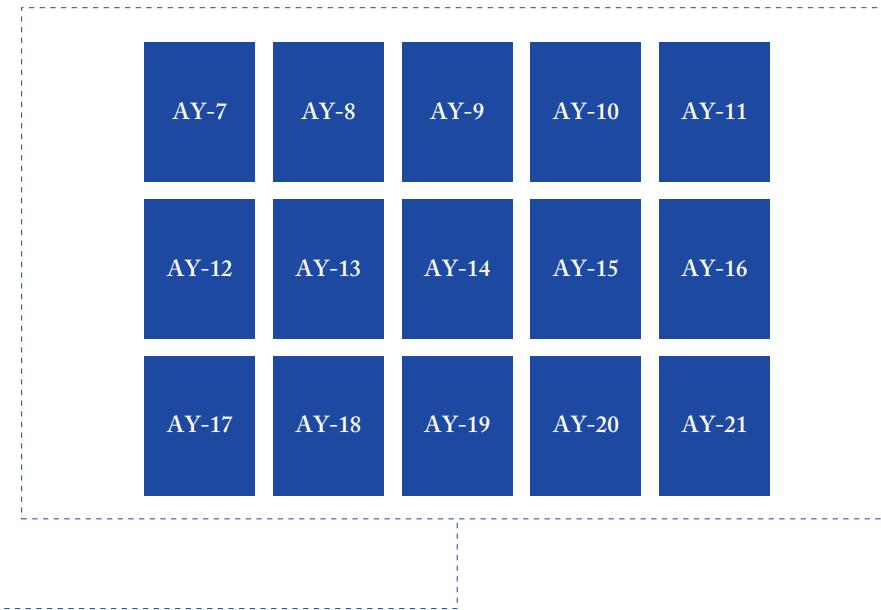
ここで展示されている作品は、GO FOR KOGEI とやまなみ工房がコラボレーションして制作されたものです。2021年からの歴代ポスターにそれぞれのアーティストが絵を加えています。

*全作品共通

無題

2025

水彩絵具／紙



AY-7
大家美咲

AY-8
中内田幸大

AY-9
大家美咲

AY-10
NANA

AY-11
山根孝文

AY-12
小川翔陽

AY-13
四白

AY-14
大家美咲

AY-15
小川翔陽

AY-16
北村悠

AY-17
北村悠

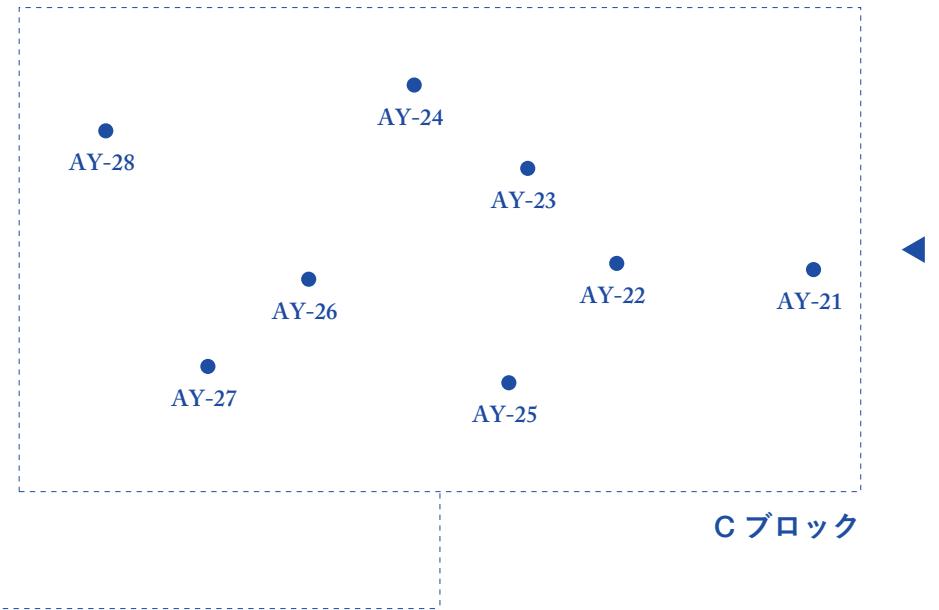
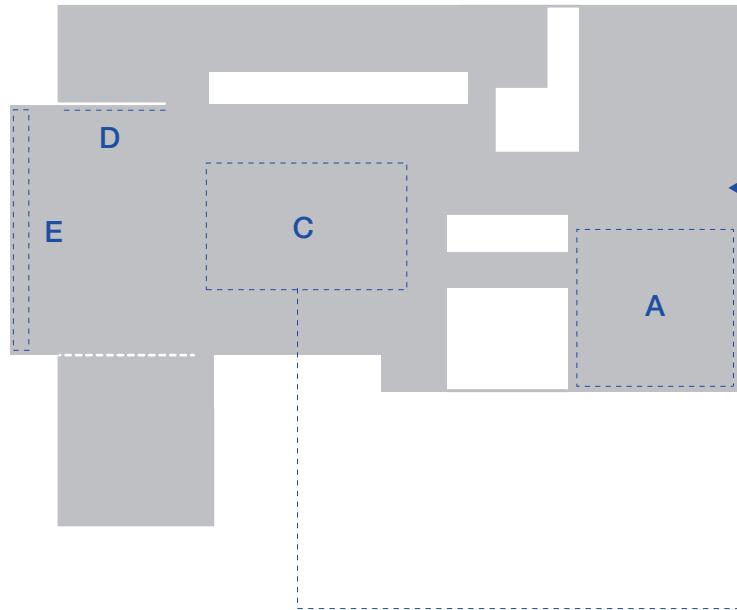
AY-18
山根孝文

AY-19
青木昂

AY-20
森田郷士

AY-21
井野友貴

H-1|HATCHi 金沢 by THE SHARE HOTELS



AY-21
山崎菜那
Yシャツ
2022
毛糸／衣類

AY-22
瀧口真代
かいじゅう
2014
糸／衣類

AY-23
河合由美子
まる
2023
刺繡糸（綿）／ニット

AY-24
河合由美子
まる
2020
刺繡糸（綿）／着物

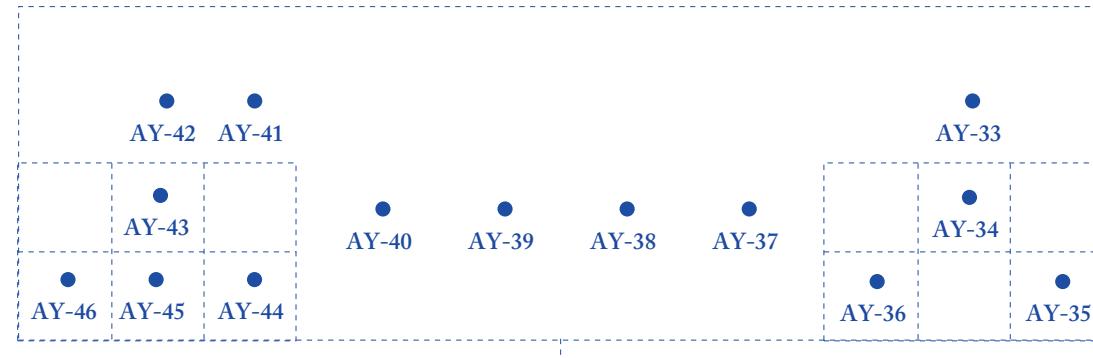
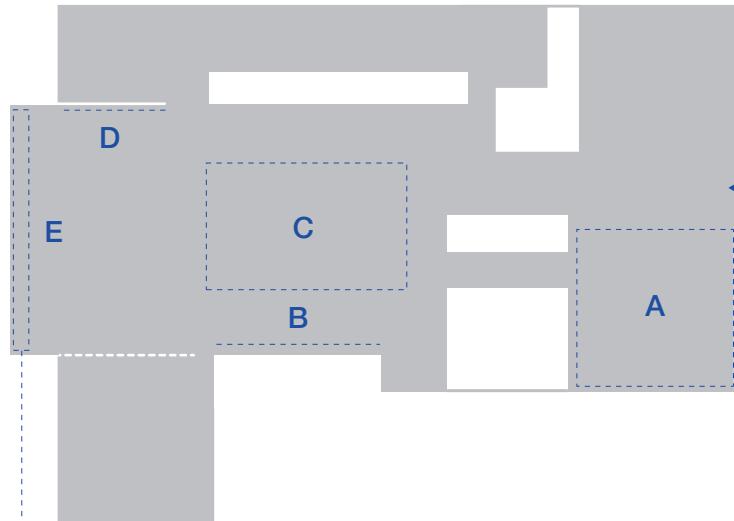
AY-25
山崎菜那
Yシャツ
2022
毛糸／衣類

AY-26
山崎菜那
無題
2024
毛糸／綿布

AY-27
山崎菜那
無題
2024
毛糸／綿布

AY-28
山崎菜那
無題
2022
毛糸／衣類

H-1|HATCHi 金沢 by THE SHARE HOTELS



E ブロック

D ブロック

AY-32
TAKATO
はたらくくるま
2017-2024
紙、ペン、テープ／段ボール

E ブロック

AY-33
中井寛虹
わに
2025
アクリル絵具、ボンド／ガムテープ、紙

AY-34
栗田淳一
無題
2019
絵具、マーカーペン、墨／紙粘土

AY-38
田村拓也
男の人
2014
マーカーペン／紙

AY-43
中井寛虹
ねこ
2025
アクリル絵具、ボンド／ガムテープ、紙

AY-35
栗田淳一
無題
2019
絵具、マーカーペン、ペッ
トボトル、髪毛／紙粘土

AY-40
栗田淳一
無題
2015
絵具、マーカーペン／紙

AY-44
中井寛虹
さる
2024
アクリル絵具、ボンド／ガムテープ、紙

AY-45
中井寛虹
くま
2024
アクリル絵具、ボンド／ガムテープ、紙

AY-36
栗田淳一
無題
2019
絵具、マーカーペン、墨／紙粘土

AY-41
中井寛虹
ちょう
2025
毛糸／衣類

AY-37
岡元俊雄
男の人
2024
墨／紙

AY-42
中井寛虹
いぬ
2025
アクリル絵具、ボンド／ガムテープ、紙

AY-46
栗田淳一
無題
2018
絵具、マーカーペン、ペッ
トボトル、髪毛／紙粘土



コレクティブアクション

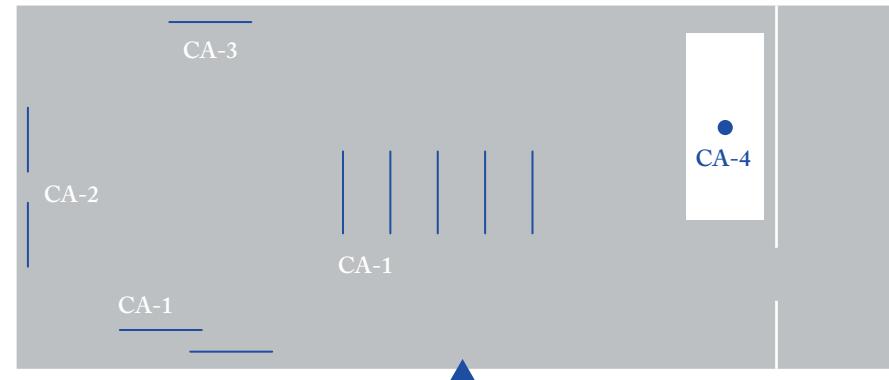
Collective Action

コレクティブアクションは、美術家であり、自然布の蒐集家・研究家として知られる吉田真一郎と、キュレーターの秋元雄史によって結成されたアーティストコレクティブである。同コレクティブの活動歴として、2024年にパリで開催されたアートフェア「Asia NOW 2024」にて《民藝スピリット「貧」》の展示を行った。そこでは、江戸時代から明治時代までに制作された自然布の仕事着を通じて民藝的な美を再評価し、今日的なインスタレーションとして提示した。これらの着物に用いられた布は、野山に自生する、あるいは人の手によって栽培された植物（葛、芭蕉、大麻など）から纖維をとり、時に使い古された紙などと撚り合わせ、織られたものである。公家や武家の文化から生まれる金満的な美とは異なり、そこには無駄を削いだ庶民の暮らしのなかで育まれた「貧」の美が立ち上がる。それらは、現代社会とも共有可能なエコロジカルなものづくりである一方、個に依らない集団性の中から生まれる新たな可能性を内包している。

本展では、吉田がこれまで蒐集した自然布の中から、大麻布に焦点を絞ってインスタレーションを展開している。テーマの「1948」は、日本国内で大麻取締法が制定された年号を示す。この年を境に国内の大麻栽培は急速に衰退し、その素材とともに、集団性に根ざしたエコロジカルなモノづくりのあり方も失われていった。本展では、その価値を改めて展示する試みである。

吉田真一郎は、1948年京都府生まれ。かつては白を追求するペインティングを制作していたが、ヨーゼフ・ボイスとの出会いから制作そのものを見直し、古美術や民俗学を学び、「白の探求」という視点から苧麻布や大麻布の研究や収集・発表を40年以上にわたって行ってきた。GO FOR KOGEI 2022の特別展「つくる—土地、暮らし、祈りが織りなすもの」（勝興寺、2022年）にも出展した。

H-2 | SKLo



CA-1

無題

年代不明

大麻纖維

CA-2

無題

2025

大麻纖維／木

CA-3

吉田真一郎

無題

年代不明

油彩／カンヴァス

CA-4

無題

年代不明

大麻布、大麻纖維

関連イベント

四知堂×GO FOR KOGEI 2025 コラボレーションメニュー

日程 | 9月13日（土）-10月19日（日） 時間 | 平日：11:00-14:00 土日祝：8:00-14:00

会場 | 四知堂 kanazawa（金沢市尾張町2-11-24） 休日 | 水曜

料金 | 飲食代



相良育弥

Sagara Ikuya

1980年兵庫県生まれ。相良は、兵庫県神戸市を拠点に、伝統的な民家や文化財の屋根葺きから現代的な内装や装飾まで、幅広く手がける茅葺き職人である。かつてはヒップホップのDJなど自然と遠い世界にいたが、宮澤賢治による『農民藝術概論』と出会い、自然風景に溶け込む実践者「百姓(暮らしに必要とされる百の業を持つ者)」を目指すことになった。茅葺き職人の道を選んだのは、「植物を刈りとり、お屋根に葺いて、使い終わったら土に還せる」からだと相良は記す。2008年には「淡河茅葺き屋根保存会 くさかんむり」を立ち上げ、2019年に法人化し、「株式会社くさかんむり」となる。茅葺き文化を普及させるべく、ワークショップやセミナーも精力的に開催している。近年は、茅葺きの更なる可能性を探究すべく、その技術に内在する美を体現するアートワークの制作も行い、国内外から高く評価されている。新たな展示会場となるスタジオあにて、相良は木桶職人・中川周士とのコラボレーションし、『木桶と茅葺き屋根の茶室』を制作した。両者は、時代の変遷の中で失われつつある技法を受け継ぎながら、現代の暮らしに即した新たな表現にも積極的に取り組む職人である。素材との向き合い方や、その社会状況に対する態度を共有しながら生み出された本作は、それ自体が「工芸」であるかを含め、現代社会における様式や美意識のあり方を逆説的に問いかける指標となるだろう。

主な活動歴に、肥土山農村歌舞伎舞台(香川県、2022年)や下木家住宅(香川県)など国指定の重要文化財をはじめとする屋根の茅葺きがある。展覧会に、「Life is Beautiful: 衣・食植・住」(GYRE gallery、2023年)、「KAYABUKI -Thatching for Tomorrow-」(Lugtje Gallery・オランダ、2023年)など。主な受賞歴に、「LOEWE Craft Prize 2024」ファイナリスト(2024年)、「ジャパンアウトドアリーダーズアワード2020」優秀賞(2020年)、「平成27年度 神戸市 文化奨励賞」(2015年)など。



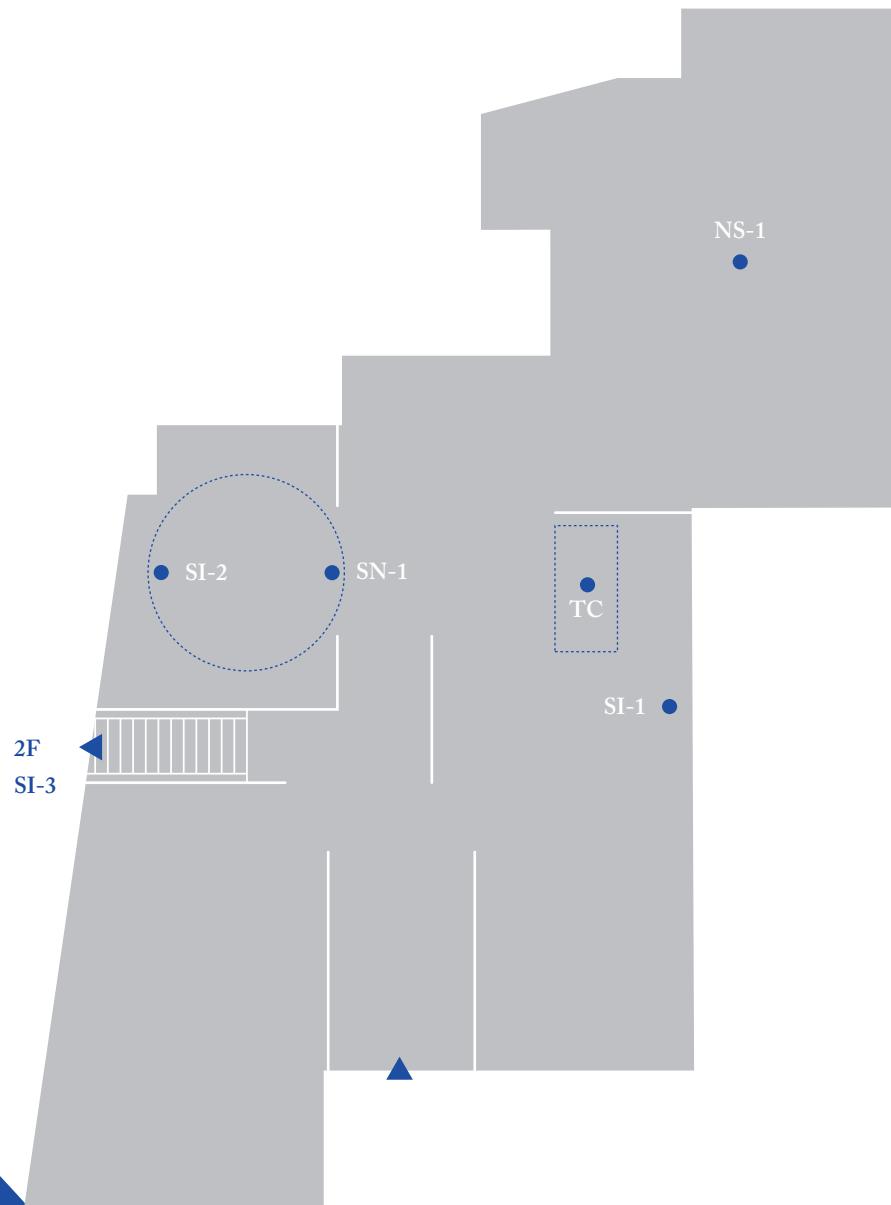
中川周士

Nakagawa Shuji

1968年京都府生まれ。1992年に京都精華大学美術学部立体造形専攻を卒業。卒業と同時に重要無形文化財保持者でもある父・清司に師事し、2003年に滋賀県大津市にて中川木工芸 比良工房を開く。中川は、室町時代から続く伝統的な桶づくりを中心に、手作りの木製品を制作している。かつて日本における木桶は、産湯に使う桶から棺桶まで、生涯にわたり人々の生活に寄り添う身近な道具であったが、高度経済成長期を経てそれらの大半はプラスチック製品などに代わった。そうした状況のなかで、中川は歴史ある木工技術を継承しながらも、国内外のデザイナーやアーティストとのコラボレーションを通じて、木桶の新たな可能性を模索し続けている。特に木桶のもつアーチ構造と建築に親和性があることに着目し、その第一歩として取り組んだのが『木桶の茶室』である。伝統的なタガ締め技法を用いた本作は、短時間で設置・解体ができるポータブルなものであり、どのような環境のもとでも茶室空間を作り出すことができる。相良育弥とともに制作した『木桶と茅葺き屋根の茶室』は、その外径に割肌を残したまま制作された巨大な木桶だ。端正に磨かれた内径と比べ無骨な表情をしているが、そこには比良山系が望める地に工房を構え、素材としてではなく生命としての木と向き合う中川の美意識が体現されている。会期中には同茶室にて茶会が開かれる。また、KAI離でも、三浦史朗と制作した組立式の湯船や風呂道具も展示している。

主な展覧会に、個展「茶の杜に惑ふ」(アートスペース福寿園、2024年)、グループ展「ジャポニスムの150年」(パリ装飾美術館、2018-2019年)ほか。主な受賞歴に、「LOEWE Craft Prize 2017」ファイナリスト(2017年)、「日本伝統工芸再生コンテスト」ロニー賞(2023年)など。ヴィクトリア&アルバート博物館とパリ装飾美術館に作品が収蔵されている。

H-3 | スタジオあ



SN-1

相良育弥 + 中川周士
木桶と茅葺き屋根の茶室
2025
稻藁、杉

NS-1

中川周士
菜桶
2025
杉

SI-1

相良育弥
あの風
2025
稻藁、ススキ

SI-2

相良育弥
無題
2025
稻藁、真鍮

SI-3

相良育弥
茅風
2025
ススキの穂先

TC | 茶道具

茶 瓢 | 六角屋
茶 杓 | 中川周士 (中川木工芸比良工房)
茶 筒 | 八木隆裕 (開化堂)
茶 碗 | 桑田卓郎
菓子器 | 若林幸恵
柄 杓 | 中川周士 (中川木工芸比良工房)

関連イベント

「スタジオあ」茶会

日程 | 10月4日 (土)、10月11日 (土)
時間 | 13:00- /14:00- /15:00- /16:00- (受付 15分前)
会場 | スタジオあ (金沢市東山2-8-26)
料金 | 1,000円 (税込)



寺澤季恵

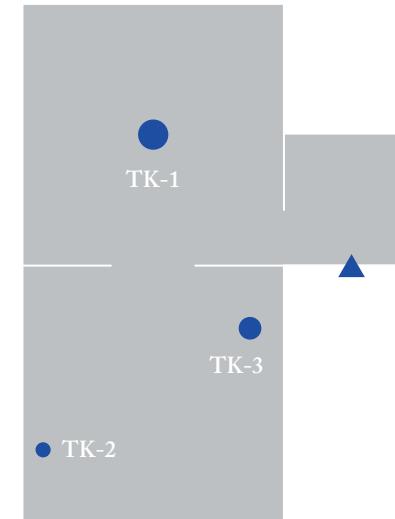
Terasawa Kie

1997年 静岡県生まれ。2020年に多摩美術大学工芸学科を卒業後、富山ガラス造形研究所(研究科)に進学。2025年3月に金沢卯辰山工芸工房を修了し、現在は金沢市内で制作している。寺澤は、一貫して「生命」をテーマに作品制作を行うガラス彫刻作家である。主に吹きガラスの技法を用いる寺澤は、溶解したガラスが自身の呼吸によって膨らむ様に生命力を見出し、手の内で蠢くマテリアルに寄り添いながら造形を行なってきた。彼女の代表作とも言える《生生》シリーズでは、反復的に増殖するガラスと、鋸びた鉄などの異素材を組み合わせることで、果実にも、あるいは臓器にも似た特異な生命を表現している。その姿は一見すると不気味さを帯びているが、腐敗や死といった負の側面から「生」を捉え直すという寺澤ならではの視点が色濃く反映されている。しかし、それら表現の根底には、素材としてのガラスが本来備える繊細さが宿っており、腐敗や死といったイメージと対をなす、生命の美しさや力強さを浮かび上がらせる。

本展では、シリーズの中でも最もサイズの大きな作品《生生2》を中心に、町家空間を活かしたインスタレーションを展開している。日々反復されるガラス吹きの行為そのものを、自らの生命をガラスに伝える「祈り」とも表現する寺澤は、作品が空間のなかで生命を宿しているような展示を目指した。

主な展覧会に、個展「生生(ショウジョウ)」(Gallery O2、2024年)、グループ展「ARTISTS' FAIR KYOTO 2025」(京都新聞ビル、2025年)、「Hysterik Nature」(三越コンテンポラリーギャラリー、2022年)、「KUMA EXHIBITION」(ANB Tokyo、2022年)など。2021年には公益財団法人クマ財団による活動支援(5期生)に選出。受賞歴には「SICF22 EXHIBITION部門」準グランプリ(2021年)、「第79回金沢市工芸展」金沢市長奨励賞(2023年)など。

H-4 | KAI



TK-1

TK-3

TK-2

TK-2

Heart Beat 25

2025

ガラス、銅

TK-1

生生 2

2024

ガラス、鉄

TK-3

生生 4

2025

ガラス、鉄



三浦史朗+宴KAIプロジェクト

Miura Shiro & En-Kai Project

三浦史朗は、1969年京都府生まれ。1995年に早稲田大学理工学部(現:創造理工学部)建築学科および大学院を修了後、数寄屋大工棟梁の中村外二に師事。その後、「とふう」「三角屋」を立ち上げ、個人住宅から店舗の設計・施工まで幅広く手がけてきた。現在は「六角屋」の代表として、建築の企画・設計・デザイン監修にとどまらず、地域づくりのプロデュースにも取り組んでいる。「宴KAIプロジェクト」は、三浦が中心となり、大工や木工、紙、竹など多様な素材を扱う職人たちと協働し、それぞれの素材に特化した新たな「ものづくり」を実践する取り組みである。2019年の「KAI-KI」を皮切りに、これまでに8つのプロジェクトを展開してきた。それらの取り組みの中で、三浦は素材の特性や職人の技術を最大限に引き出すために、さまざまな関係項を編み直す「構匠(こうしょう)」として関わってきた。そのアプローチは、図面に基づき構築的に創出される点において建築的でもあり、同時に職人の「手の内」から生まれる点において工芸的でもある。こうした両立を架橋するプロデュースは、数寄屋建築に深く関わってきた三浦ならではの実践であると言えるだろう。

KAI 離は、これまで三浦が手がけてきた作品を収めている場所だ。一般には非公開であったその場所を、GO FOR KOGEI 2024で初めて広く公開し、茶の湯の源流を遡る宴席「淋汗草事」を開催した。今年は、新たな取り組みとして上出惠悟とコラボレーションし、組み立て式の茶室《回炉》を取り囲む襖絵のアップデートと、新たな宴席「現代に生きる文人文化—春日山窯と長右衛門窯」のプロデュースを試みる。

関連イベント

現代に生きる文人文化—春日山窯と長右衛門窯

日程 | 9月23日(火・祝) 時間 | 17:00-21:00(開場30分前)

会場 | KAI 離(金沢市東山2-25-60)

料金 | 25,000円(税込)



上出惠悟

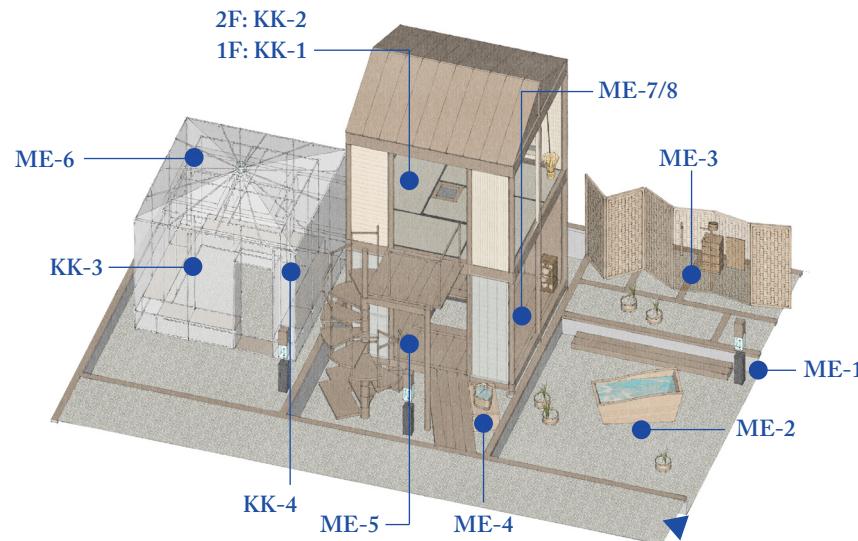
Kamide Keigo

1981年石川県生まれ。2006年に東京藝術大学美術学部絵画科油画専攻を卒業。同年より、1879年創業の九谷焼窯元・上出長右衛門窯の後継者として、職人と協働しながら伝統の枠に囚われないユーモラスな発想で九谷焼を現代に伝えている。2013年には合同会社上出瓷藝を設立し、それを機に本格的に窯の経営に携わるようになる。その中で、上出は古典的な染色技法である「筒描」を用いて企業の商品企画やパッケージデザイン、アパレルブランドとのコラボレーションなどを手がけてきた。一方で、美術作家・画家としても精力的に活動しており、大学で学んだ油画に加えて、水墨画や瓷板画、磁土を用いた彫刻的作品など多様な技法を用いた表現に取り組んでいる。その活動は、九谷焼の枠を越えた展開を見せている。窯元としての役割と個人としての表現とを使い分けながら柔軟に横断することで、両者が関係し合い、それにより個々の活動も際立って浮かび上がってくる。それこそが上出の特徴であるだろう。

本展にて、上出は三浦が設えた空間のために新たな障壁画《夢の香》を制作した。そこで参照したのは、石川を代表する工芸の源流をとった文人一本会場近くに春日山窯を開窯した青木木米と、京都から金沢に移り加賀友禅を大成した宮崎友禅斎である。上出は、彼らの足跡を辿りながら、卯辰山からの風景を描き出した。低層は水墨画、上層は油画と作風を変えて表現された襖絵は、三浦の《回炉》に新たな息吹を吹き込んでいる。

主な展覧会に、個展「Izura」(東京藝術大学 藝大アートプラザ、2024年)、「Windows」(東福寺塔頭光明院、2024年)、や「新蕉」(Yoshimi Arts、2022年)、グループ展「座辺の現代美術 -景-」(大徳寺瑞峰院、2024年)、「第5回金沢・世界工芸トリエンナーレ」(金沢21世紀美術館、2022年)など。作品は、金沢21世紀美術館や高橋龍太郎コレクションなどに収蔵されている。

H-5 | KAI 離



ME-1

回木
2018
木、アクリル、
スチールパイプ

ME-2

回湯 組立式湯舟
2020
檜

ME-3

回湯 風呂道具一式
2020
片手桶・丸湯桶・腰掛け：高野檜
石鹼台：木曽檜
箱：桼

ME-5

回炉
2019
柱：桧、足場丸太
壁、襖：鳥の子紙
天井：杉（足場板）
床（1階）：杉（足場板）
床（2階）：畳

ME-4

回湯 手水道具一式
2020
木曽檜

ME-6

回層庵
2019
アルミ無垢材、アクリル板、
LED、布、水晶

ME-7

回竹 竹茶道具一式
2020
道具箱：栗
竹茶道具：モウソウチク

ME-8

回竹 竹照明
2020
モウソウチク

KK-1

上出惠悟
夢の香
2025
墨／和紙、パネル

KK-2

上出惠悟
卯辰山望湖台
2025
油彩／カンヴァス、パネル

KK-3

上出惠悟
伊奈美莊
2025
油彩／カンヴァス

KK-4

上出惠悟
浅野川
2025
墨／和紙

夢の香

上出惠悟

「KAI 離」は東山の最奥、卯辰山（春日山）の西斜面に位置し、裏手には加賀友禅の祖である宮崎友禅斎が眠る龍国寺、北側には再興九谷の祖・青木木米が築いた春日山窯があった場所である。

宮崎友禅斎は出自などに謎が多いが、一説には能登穴水に生まれ京都で扇絵師として名声を博した後、1712年に金沢へ戻ったとされる。観音町の加賀染・太郎田屋與右衛門のもとで米糊を用いた拔染法を確立させ、加賀友禅の源流を築き1736年に83歳で没した。180年後の1920年に「金沢最後の文人」と称された細野燕台によって龍国寺の墓が発見され、三越百貨店の主催で墓前祭が行われた。今でも年に一度、加賀友禅の関係者によって祭典が営まれている。

一方、京都の陶工で文人でもあった青木木米は、1806年に国焼の奨励のため加賀藩より招かれ卯辰山の一峰・春日山（別名：帝慶山）の裾に築窯した。陶郷・景德鎮を加賀に実現することを目指したが、金沢城二の丸殿閣の火災の影響による藩の財政難等からその目的を果たすことなく、1808年に帰京した。木米に私淑した陶工の原吳山が「（木米）故ありて京地に帰る」と伝えているが、この春日山窯を端緒として1700年頃に途絶えていた九谷焼が再興され、現代へと繋がっていった。

この土地を通じて、石川を代表する工芸の源流となった二人の思いや歴史の積層を見ることができる。卯辰山は金沢城の向かい側にあることから「向かい山」とも呼ばれ、城下を一望できる地理的条件から、警護上入山が厳しく禁じられていた。東山、茶臼山、観音山、臥龍山、宇多須山など数多くの異名は、人々の深い親しみを物語っているようだ。文人たちが「向かい山」を「夢香山」と呼んだのも、登ることのできない山への憧憬ゆえかもしれない。やがて1867年に14代藩主・前田慶寧がその禁を解き、卯辰山は市民に開かれた公園として整備された。小説家・徳田秋聲も幼少期に度々卯辰山を訪れ、時を過ごしたという。

今回、「KAI 離」での展示にあたり、私は友禅斎と木米という二人の人物に着目した。ともに京都より来たる人である。そして卯辰山の歴史とそこに刻まれた人々の記憶を辿りながら、金沢の人々ですから長く望むことができなかつたであろう卯辰山の頂上（望湖台）からの風景を油画で、また数々の異名を持つ卯辰山の姿を友禅斎が用いた米糊による「筒描き」という技法で墨画を描いた。これらの絵を「KAI 離」のオーナーで構匠（こうしょう）・三浦史朗氏の茶室「回炉」の襖絵として仕立てた。三浦氏もまた京都より来る人物である。